国語科教育実践の探究
――高森邦明博士の作文教育論のもとで――

国語教育専修　　安　　直　哉

1．はじめに

今年度で，岐阜県教育委員会12年目岐阜大学研修講師として４年目になる。過去の開講テーマは次の通りである。平成16年度「国語教育のあゆみ」，平成17年度「国語教育のあゆみ」，平成18年度「国語科教育実践論文を読む」。

今年度は少し間口を広くし，「国語科教育実践の探究」というテーマで開催した。事前に研修生に配布したシラバスには以下のような計画を示しておいた。

本コース１日目では，受講者各人の持つ課題について，その解決の示唆となる文献等を貸与します。また，優れた国語科教育実践論文を講読します。

最終日には，貸与された文献から学んだ知見を紹介し，それに基づいて受講生同士で意見交換をします。また，その日も残りの時間で，優れた国語科教育実践論文を講読します。

両日とも，学習に変化を持たせるために，国語科教育関係のビデオを視聴する時間も設けたいと思います。

受講研修生は６名であった（小学校教諭４名，中学校教諭１名，高等学校教諭１名）。このうち，本稿では，小学校の教壇に立つＡ教諭に焦点を絞って論じていくこととする。

2．Ａ教諭との出会い

私がＡ教諭と出会った時期は，十数年前にさかのぼる。岐阜大学に着任して数年経ったとき，国語教育講座（当時の通称は，国語国文学科）の学生の中にＡ君（後のＡ教諭）はいた。とにかく真面目な男子学生だった。ゼミは他の先生のところに所属していたが，教育実習の最中には質問を携えて私の研究室を訪ねて来るほど，勉学に熱心だった。

十数年ぶりの再会である。12年目研修においてＡ教諭は，「書くこと」領域の指導技術を身に付けたいという希望だった。そこで私がＡ教諭に紹介した本が，高森邦明著『国語科指導の技術学』である。同書は，高森邦明博士（以下，高森博士，博士と省略する。）の国語科指導技術学を網羅した好書であり，高森博士の学問を広く実践化するのに最適の指南書である。

次章では，高森博士の作文教育論を紹介する。博士の学問の一端を示すことで，Ａ教諭の実践の背景にある理論的根拠が理解されやすくなるからである。

3．高森邦明博士の作文教育論

(1)　作文教育の歴史的研究

高森邦明博士の著作のうち，多分野で参考にされる（インパクト・ファクターの高い）代表作

は，大著『近代国語教育史』であろうと思われる。

作文教育に関しては，『近代国語教育史』中の「第五章　大正新教育と作文教育の革新」で論究されている。大正デモクラシー期における地方（富山県）の教育資料の中から，高橋長太郎の実践論文を発掘している。そこでは日記と対話による綴り方が展開されていた。博士は，その実践論文について，「国語教育実践の歴史のなかで，新領域を開拓してみせたものということができる。」（pp.141-142.）と高く評価している。

また，保科孝一の随意選題批判も紹介している。保科の国語教育論と重ね合わせると，自ずと納得させられる。しかし，保科の中にあっても随意選題に対する評価は微妙にぶれていたのであった。こうした保科の心の動きを追跡していく手腕には，博士一流のセンスが光っている。

芦田恵之助の随意選題論については，必要以上に過大評価することなく冷静に考察している。芦田が創始したと思われている業績のうち，少なからぬ部分は，それ以前の教育者の実践を反映しているとの指摘がなされている。

富山県の西野米次郎という指導者は，随意選題派とも課題指導派とも区分けできない綴り方論者だった。しかしそれを安易に折衷主義とは呼べない。西野の理論の変遷を綿密に読み解き，その精妙さをあぶり出していく過程は，博士ならではの造詣によって可能ならしめたものである。

博士は同章で「赤い鳥運動」についても考察を加えている。赤い鳥綴り方の文芸主義リアリズムが，生活綴り方に刺激を与え，教師の文学的趣味を伸ばし，文章観，文章指導力を高めることになったと言うのである。

平成14年に，高森邦明著『大正昭和初期における生活表現の綴り方の研究―東京高師付属小学校教師の実践と理論―』が上梓された。同書は博士の学位論文である。同書では，『小学綴方教授細目』の編集と実施に携わった東京高等師範学校付属小学校の四教師，飯田恒作，丸山林平，田中豊太郎，千葉春雄の実践と理論が究明されている。従来の研究は，随意選題論の席巻や生活綴り方の隆盛という，目を引く現象のみにとらわれてきた。しかしその一方で，綴り方教育を静かに動かしていった様々な働きが存在し，そうした動向の一つが「生活表現の綴り方」の事象だという。こうした独創的な研究視点こそが，本研究の醍醐味となっている。

ここでは同書中の「芦田恵之助の随意選題提唱への過程」を取り上げる。芦田恵之助の随意選題は有名である。芦田自身も自家薬籠中の物として，随意選題に愛着を持っていた。随意選題が芦田の中でどのように育っていったかを文献資料から分析している。従来は，「課題」と「随意選題」が対立していたかのように捉えられる向きもあったが，芦田の中では，「選題と課題の区別は，不思議なほど意識されていな」（p.65.）かった。むしろ「自作」という作業についての，教授過程上の位置づけを模索するなかで，随意選題は形成されていったのであった。

(2)　作文教育の比較的研究

高森博士の学問的基盤にはイギリスの作文教育があった。高森邦明訳『ガレー　作文指導法の原理』の「訳者あとがき」には，「今日，戦後の教育の見直しが迫られ，国語教育においてもこれまでの言語技能重視，指導技術重視の傾向の反省から，本質論へ，へさきを向けるかにみられる」（p.222.）と書かれてある。これは同訳書が刊行された昭和54年時の「今日」であるが，そのまま平成19年の今日にも通じる動向である。

同書には，意表を突く警句が散りばめられている。例えば次のようである。

生徒たち，親たち，国語教科書の編者の中には，そして教師の中にさえ（特に他教科の教師に），依然として，国語教師は生徒たちの精神の発達，あるいは言語技能の熟達などとは無関係に，文法，要約，説明，作文などを教えてよいのだという考え方が多いように見える。こういう考え方は，生徒たちが入試の「国語」に合格しさえすればいいんだというわけである。この考え方がよくないことはいうまでもない。(p.11.)

この指摘の背景には，イギリスの文法学校（グラマースクール）の伝統的カリキュラムの存在がある。しかし，それにとどまらず，現在の日本の国語科の置かれている状況とも（部分的にではあるが）符合する。

同書では作文教育の基本的原理の一つとして，書くにあたって目的を持たせることを力説する。作文を書かなければならない必然性（目的）を自覚していると，自然と筆も進むのである。言語についても目的論的機能の面から理解していく。つまり，「実際の語，いわば現実生活の文脈の中で用いられる語は，死物ではなく，生きている心の目的を伝える表現の織物の中に織り込まれたところの，思想・感情・意図などを着ている活動的な存在である。」(p.25.) と捉える。イギリスの言語学界・言語教育学界に根付いている機能主義的言語観の一端を読み取ることができる。

(3) 言語生活的作文教育論

高森博士は，ご自身が提唱する作文教育論を「言語生活的作文」と呼んでいる。その内容は，『作文教育論１　作文教育における目標と方法の原理』，『作文教育論２　言語生活的作文の指導』，『作文教育論３　言語生活的作文の実践研究』の三部作に体系立てられている。

『作文教育論１　作文教育における目標と方法の原理』は，「今までの作文教育論の多くは，一個の見解を述べるに急なあまり，他の言説や遺産の継承発展ということについては配慮することが少なかった」(p.11.) という問題点を克服すべく，古今東西の作文教育論を俯瞰しているところに最大の特色がある。同書では，作文教育の目標を，芸術教科的目標，用具教科的目標，基礎教科的目標に大別し，それぞれの留意点を詳述している。ここでは芸術教科的目標に関する論を取り上げてみよう。博士は伊藤整の論説から，「教師は文学の教育はすることはできない，できることは綴り方的な技術の指導だけである」(p.79.) という仮説を一旦は導き出す。しかしそれを安易には肯定しない。例示をしたうえで，「作文教育においても，相応の文学的教育は可能だと考えられなくてはならない。その意味から，上述したような，文学の教育はできないがゆえに，言語の教育をするだけであるという考え方は，作文教育の仕事をせまく限定し，文学修業を過大視することになる」(p.80.) と結論づける。作文教育の可能性をできるだけ高度・広範囲に見極めていこうとする，博士の探究心を垣間見ることができる。

『作文教育論２　言語生活的作文の指導』では，言語生活的作文指導の理論が説かれている。「主として国語科作文単元外で書かれる作文」(p.3.) のことを言語生活的作文と呼ぶ。言語生活的作文の種類としては，「学級経営的作文」「学級文化的作文」「学級指導的作文」「臨場的作文」「行事的作文」「生活文化的作文」が挙げられている。学級文化的作文の例としては，学級新聞，壁新聞，標語，ポスター，カルタ，マンガ，イラスト，学級歌，応援歌，絵本，文集などがある。学級歌，応援歌について，博士は，「今日のように，ともすれば学級が崩壊の方に傾きがちな，険悪なムー

ドがはびこっている時代においては，これらの役割は無視できない。」(p.142.) と指摘する。臨場的作文の例としては，放送文，演説・あいさつの文などがある。臨場的作文は，まさに抜き差しならない現場のなかで現実に対処するために書かれる。そこに高密度の教育効果が確認できるのである。

『作文教育論 3　言語生活的作文の実践研究』では，言語生活的作文指導について，「その実践例の研究を通して，研究の方法と意義とを一層具体的に追及」(pp.16-17.) することを目的としている。九つの実践事例を対象とした研究になっている。「日光移動教室」という実践では，子どもたちによって作られた旅の「しおり」(10冊) を分析している。また，「壁新聞コンクール」では，壁新聞に込められた，子どもたちの発想のユニークさや自律性を指摘する。国語科作文の範囲外での，多様な作文場面を引き出して，我々に見せてくれている。言語生活的作文の裾野の広さが感じられる。それのみではなく，国語科作文という比較的格式高い表現活動場面だけでは，表されることのない子どもたちの一面も抽出してみせている。パロディ精神などの，いわば心のゆとりといった側面である。

博士の言語生活的作文教育論は，従来の作文教育の間隙を縫い合わせつつ壮大な体系と可能性を示したものと言えよう。

(4)　言語生活的作文教育論への道

高森博士の若手時代の著作から，言語生活的作文教育論の生成過程を遡及してみよう。

博士は昭和40年に『作文教育の探求――目標と方法の原理――』を上梓している。同書では「経験の拡大」(p.32.) が作文教育の目標の一つとして掲げられている。「新しい経験は，計画が立案されるときに予定される。たとえば学級雑誌を作るという計画であれば，造本のための技術的なものは別として（それも生徒たちみずから行なって楽しい仕事であるけれども)，書くためにのみにでも，さまざまな学校行事，劇や音楽，旅行，遠足，インタビュウなどへの参加等の活動が予定される。その他に農業や工業，交通，商業などの経験，動植物の管理栽培など，有効な経験は多いであろう。さらに地理歴史的探訪，文学散歩，民俗的民話的な調査なども好ましい経験として組み入れられよう。」(pp.98-99.) という提言に，後の言語生活的作文教育論の原型を見ることができる。同書は高森（1986）の元本となっている。ここからも，博士の作文教育の志向性が生涯一貫していることがわかる。

ただ，昭和49年刊『作文指導法の理論』においては，言語生活的作文教育論はまったく言及されていない。その理由は同書の目的にあると言える。同書は作文の指導過程論を説いた著作である。言語生活的作文教育論とは，指導過程における理論ではなく，指導機会における理論なのである。よって，一貫して指導過程上の理論を整理することに努めた『作文指導法の理論』中には，言語生活的作文教育論はその姿を見せなかったのである。

それとは対照的に，言語生活的作文教育論が本格的に展開されたのが，昭和55年刊『あらゆる機会をとらえる作文指導』である。同書の最大の特徴は，博士の説く言語生活的作文教育に合致（または近似）した実践例が数多く収録されていることである。そうした実践例を読むことによって，博士の言う言語生活的作文の指導論が，より具体的・実体的に理解できるのである。例えば「落し物を知らせる放送文の指導（小学二年)」では，「機会をすばやくとらえた指導」，「臨

場的作文」の実際が詳述されている。学校生活のほぼすべての機会が作文指導に繋がるという様子がよく分かる。

4．A 教諭と「作文指導の技術学」

上記のような作文教育論を実際に行なう際，教師が身に付けておかなければならない種々の指導技術がある。それを体系的に説いているのが平成５年刊『国語科指導の技術学』である。同書は作文指導のみでなく，読解指導，国語科単元的指導など，国語科の全領域の指導技術を網羅している。A 教諭は，主に同書中の「第二部　作文指導の技術学」の箇所を読み解いて，自らの糧とした。

研修５日目に，A 教諭は同書の読解に基づくレポートを提出している。同レポートの後半「本書から学んだこと」を以下に引用する（引用文は一部字句を修正している）。長い引用となるが，A 教諭の12年目大学研修の内実を知ることができる数少ない文字資料なので，紙幅を大きく割いて掲載することとする。

「平成18年度　岐阜県における児童生徒の学習状況調査」の調査結果の分析によると，本県の小学校国語科における課題の一つとして，「根拠や理由を明らかにして決められた字数で書く力」が挙げられている。「高学年でこうした力を付けるために，中学年において『書くこと』領域の指導はどうあるべきか。」ということが，この研修における私の問題意識である。

本書では，作文を「言語生活文系列」「感想文系列」「説明文系列」と三つに分類し，それぞれの文種の定義や，指導の意義・方法を示している。上記の問題意識に照らして，ここでは「説明文系列」の「 説明文 」「記録文」を取り上げたが，他の文種についても非常に学ぶことが多かった。

第一は，各文種の定義についてである。例えば，説明文は「物事の仕方・作り方を述べるもの」と定義している。(中略)

第二は，題材についてである。作文指導において，私が大切にしたいことは，児童が書きたいと願う必然性のある題材の開発である。本書でも，筆者は「『説明の仕方を学ばせる』という説明文の指導の目的を実現するには，それに最もふさわしい題材を選ぶことが基本に置かれなくてはならない。」など，書く対象（題材）の選択の仕方について，文種ごとに詳しく言及している。

第三は，各文種の指導の方法である。「取材」から「記述」までの指導のポイントが，文種の性質に合わせて書かれている。

また，筆者は，書く対象によっては，できるだけ正しく，わかりやすく表現するために，写真，図表，グラフ，イラスト等を取り入れてレイアウトを工夫すること（「編集する力」）にも言及している。新聞作り，本作り等で取り入れていきたい。

本書は，主に「取材」「構想」「記述」までの指導技術が書かれているが，「推敲」については，ほとんど言及されていない。実際に作文指導を行う際，推敲の指導に困ることが多い。私が取り組んでみたいと考えているのは，モデルから学んだことを駆使して，仲間（ペア又はグループ）と，下書きの良さや改善点を話し合い，再度自分の下書きを見つめ直すという推敲

である。他には，どのような推敲の方法があるか，他の書籍で調べてみたいと考えている。

A 教諭は，『国語科指導の技術学』から多くを学んだのみならず，そこで学び足りなかった課題（具体的には，推敲指導の方法）も抽出し，さらに探究を試みようとしている。そこからは，学び続けることで教師がより教師らしくなっていく，典型的な姿が見えてくる。自己研鑽を重ねることで，教師は，その職業人としての責務を全うしていく。この12年目岐阜大学研修がそうした研鑽のきっかけとなり得たことは，たいへん意義深いと言えよう。

5．まとめ――A 教諭の研究授業――

平成19年11月下旬の某日，12年目研修の成果を示す A 教諭の研究授業が実施された。岐阜県中濃地域の小規模小学校である。第 3 学年児童全12名のクラスであった。

「大事なことをたしかめよう」（全17時間）という大単元のもと，「食べ物はかせになろう―本で調べる―（書くこと）」という教材を扱った。本時は17時間のうちの14時間目に当たる。「本時のねらい」は，「調べた食べ物の情報カードの内容に小見出しをつけて整理し，書く必要のある事柄を取捨選択したり並べ替えたりすることができる。」というものであった。

「『さつまいも図かん』を作ろう」というテーマに沿って，児童は様々な角度からさつまいもを調べ，作文の構想を練った。本時においては，特に「小見出しを書いて順番を考え，『中』に書くことを決めよう」という課題のもと，作文本旨の構想を中心に支援が行われた。小人数クラスの特性を生かし，A 教諭の適切な助言のもと，統一感のある作文活動が展開された。児童各人の作文題目は，A 教諭によって「さつまいもの種類」「さつまいもの栄養」「さつまいもの歴史」「さつまいもの特徴」「さつまいもの食べ方（料理）」「さつまいもの食べ方（おかし）」に分類された。クラス全体で一冊の，手作り「さつまいも図かん」が出来上がることになる。

A 教諭が本時で最も力を入れたのは，段落指導であった。A 教諭自ら構想を例示した。それは「なえのじょうずなうえ方のこつ」というテーマのもとで，「土をほり起こす」「うねを作る」「なえをうえる」「水やりをする」という四段階の作業を設定し，その一段階ごとに一段落で説明文を書くというモデルであった。具体例を提示することによって，全体の構想が，段落の積み重ねによって形成されることを児童は理解した。説明的文章作文の基礎の指導方法として，巧みなものであった。児童の中には「うね（畝）」の意味が分からなかった子もいたが，その質問に対しても，A 教諭は的確な回答を示していた。

A 教諭の人柄が反映された温もりのある授業であった。全校教職員協力のもと，山間の小学校で展開された，きめ細やかな研究授業に心から敬意を表する。

【参考文献】

高森邦明（1965）『作文教育の探求――目標と方法の原理――』私家版
高森邦明（1974）『作文指導法の理論』明治図書
高森邦明（1979）『近代国語教育史』鳩の森書房
高森邦明訳（1979）『ガレー　作文指導法の原理』鳩の森書房
高森邦明（1980）『あらゆる機会をとらえる作文指導』明治図書
高森邦明（1984）『作文教育論 2　言語生活的作文の指導』文化書房博文社

高森邦明（1984）『作文教育論３　言語生活的作文の実践研究』文化書房博文社
高森邦明（1986）『作文教育論１　作文教育における目標と方法の原理』文化書房博文社
高森邦明（1993）『国語科指導の技術学』光村図書
高森邦明（2002）『大正昭和初期における生活表現の綴り方の研究―東京高師付属小学校教師の実践と理論―』高文堂出版社